

イランの大地震から 始まった付き合い

鈴木 均

二〇一一年三月一日の東日本大震災は、マグニチュード九の大地震とこれにもなった大津波によって一万五八〇〇人の死者と三〇〇〇人の行方不明者を出し、いまだに多数の方が仮設住宅での生活を強いられている。岩手・宮城・福島を三県を中心とする太平洋側の南東北地方に甚大な被害をもたらしたこの未曾有の大震災の傷が癒えるまでにはまだまだ多くの時間と地域を越えた努力が必要であろう。さらに今回の震災は福島第一原子力発電所のメルトダウン事故をとまなびとなり、これが震災復興の大きな足かせになっている。

だがこの小文で私が語ろうと思っているのは、このような「大状況」の話ではない。私がここで語りたいのは、今回の震災で改めて思い出すことになったあるイラン人との個人的な出会いについてである。

●イランのルードバル大地震

一九九〇年の六月二〇日深夜、イラン北部のルードバル付近でマグニチュード七・三の大地震が発生した。筆者は一九八九年から二年間の予定でテヘランに赴任しており、この地震をテヘランで体験している。この震災の死者数は新聞報道では四万人とも五万人とも報道されたが、実際には一万八〇〇〇人前後であったのではないかと推定されている（後出の佃他論文）。もしこの推定が正しいとすると、犠牲者の規模では今回の東日本大震災とほぼ匹敵する震災であったといえよう。

ところでこの地震の直後、当時テヘラン大学に留学していた山内和也氏（現在は東京文化財研究所文化遺産国際協力センター地域環境研究室長）から私のもとに電話で、今回の地震について日本の調査団が訪イするので調査に協力してもらえない

かという依頼があった。一九八九年一〇月にイランに赴任したものの、前年の九月にイラン・イラク戦争がようやく終結し、六月にホメイニーが死去したばかりのこの国で、どのように調査活動を進めるか暗中模索の状態にあった私は、そのためのきっかけを得たいという思いもあり地震調査に協力することにした。

この時の調査団の団長が東京大学地震研究所の佃為成教授（当時）であり、佃先生にはその後折に触れて親しくさせていただいている。またテヘラン大学側の受け入れグループを統括していたのが地球物理研究所の技官であったソレイマーン・ソルターニヤーン氏である。このテヘラン大学地球物理研究所（一九五七年設立）は、日本の地磁気学の権威である今道周一（元柿岡地磁気観測所長、故人）が一九六〇年代後半に招かれて指導に当たっていた⁽¹⁾ことも筆者にとつて奇遇であった。というのは今道は長崎出身で、筆者の母方の祖母と同郷であったからである。

さてこの時の調査は観測点の設置による余震観測が主たる目的であり、そのために九日間のフィールドワークで東西一〇〇

キロ、南北九〇キロの地域に全部で七カ所に地震計を設置し、観測を行った。そしてその傍ら物的被害や地変の観察を行い、また地震当時の状況や前兆現象、地震後の変化についての聴き取り調査を実施したのである。この時の観察記録と聴き取りの内容が調査の経緯とともに纏められて、『地震研究所彙報』（八六号、一九九一年）に掲載されている⁽²⁾。今回この論文を改めて読むと、当時の地震被災地の調査活動の様子が詳細に記録されており、私にとつてこの時の体験がその後のイラン研究の原点であったという思いを新たにしている。

●ソルターニヤーン氏との 出会い

だがそれ以上にこの調査が私にとつて大切だったのは、これがソレイマーン・ソルターニヤーン氏とその家族との、現在までにおよぶ付き合いのきっかけになったことである。ソルターニヤーン氏一家は当時テヘラン大学敷地内の官舎で生活していたが、一見してご夫婦と三人の子供にとつてはいかにも手狭な住居であった。

だがその後ソルターニヤーン家はテヘランの西部（当時）に

1958年東京都生まれ。86年東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了、同年アジア経済研究所研究員。学術博士。専門はイランおよびアフガニスタンの地域研究。1989-91年と1999-2001年の2度テヘランに派遣された。主要著作は『現代イランの農村都市—革命・戦争と地方社会の変容—』（勁草書房、2011年）。

建設された集合住宅に移り、五人家族向けとしては余裕のある広さでようやく落ち着いたと思ったのも束の間、やがて子供たちが次々に独立して現在では少し広すぎるお宅にご夫婦二人で生活している。

私がソルターニヤーン氏と親しく付き合うようになったひとつの理由は、彼が地震調査のためにイラン国内を広く歩き回っていたということである。私のイラン研究にはひとつのオブセッションのようなものがあって、それはイランを知るためにはいずれにしても地方を知らなければならぬということである。テヘランだけを見ていたのではイランのことは決して分からない。だから私はこれまでどんなに短いイラン出張でも、テヘランだけを訪ねたことは一度もない。

だがソルターニヤーン氏との長い付き合いのうちひとつの理由は、彼がイランの西方マハーバード出身のクルド人であったことである。ソルターニヤーン氏と出会った最初の頃に強く感じていたことのひとつは、彼が周囲のイラン人同僚と比べて様々な判断において「大人である」ということであった。だが実は私がそうした感想を抱いた

背景には、彼にとって単にクルド人ということ以上の理由があったのである。彼は幼少期に自分の父親が政治犯として長く投獄されていた。それが彼の積年のトラウマのようになっていたことを知ったのはずっと後のことであるが。

テヘラン在住のクルド人といった時、そこには様々な意味合いが生じてくる。そのひとつが彼の教育方針である。彼の三人の子供たちは、全員理科系に進んだが、その理由は明確である。彼の説明によれば、動乱の世の中で生き延びていくためには理科系の学歴の方が身の助けになるのである。そして彼自身はイラン内外の情勢について、アンテナを研ぎ澄ませて常に自ら判断している。もっともこの態度はクルド人である彼に限ったことではなく、日本人などと比べてイラン人一般にもあてはまることではある。国の情勢が常に不安定なだけに、地方も含めて人々の情報に対する感度が高いのである。

気がついてみるとこの二〇余年、一九九九年からの二年間のテヘラン赴任を含めて私はイランを訪問するたびにソルターニヤーン氏のお宅を訪ね、彼にその時々々のイラン情勢の見方につ

いて彼に手ほどきを受けてきたような気がする。それはソルターニヤーン氏にとっても刺激となったようで、彼は地球物理研究所を退職してから数年間をかけて、ある意味で自分史としてのクルディスタン現代史を彼の母語であるクルド語で書き上げた。そして嬉しいことに、これを日本で出版する計画が現在進行中である。

●自然災害は

何かの始まりでもある

二〇一二年の三月一日、職場である千葉県幕張の研究所で締切り前の原稿の手直しに追われていた私は、午後二時四六分頃に発生した地震でその晩は職場に泊まらざるを得なくなつた。その晩津波の被害が刻々と伝えられ、被害が東北地方から北関東の太平洋沿岸約五〇〇キロに及ぶことを知って、私の体内の物差しは咄嗟にそれがテヘランからルードバルまでの距離のほぼ二倍に匹敵することを想起させた。

一九九〇年の七月にルードバルの震災調査で目撃した大震災の被害がテヘランから同地まで延々と及んでいることを頭の中で思い浮かべようとして、私はすぐにそれが自らの想像力

を遙かに超える事態であることを思い知った。だがそれでも、私はどのような災害であれ、それが起こった次の瞬間から、すべての「生き延びた人々」にとって何らかの新たな交流の始まりを内包していることを信じざるを得ない。

それは私自身が自分の研究者生活の出発点において遭遇した大災害とその後の体験から学び取った「小さな真実」であると思っている。

《注》

(1)今道周一「イランの地球物理研究所（日本人科学者の海外便り）」『自然』二巻七号（一九六六年七月）、四〇—四三ページ。当時の日・イ関係にも言及がある。

(2)佃為成、酒井要、橋本信一、Mohammad Reza Gheitanchi、鈴木均、Soleiman Soltanian、Parvis Mozaffari「一九九〇年イラン北西部ルードバル地震の被害や地変の観察と聞き取り調査」『地震研究所彙報』六六号（一九九一年）、四一九—四五四ページ。同論文は現在インターネットでもダウンロード可能である（<http://jairo.nii.ac.jp/0021/00006969/an>）。